

【研究資料】

ワイキキでの同郷会記念写真

——山口県沖家室島のハワイ移民関連資料——

安井眞奈美

一 古写真との出会い

まず写真1をご覧ください。

これは、山口県大島郡周防大島町沖家室島^{おきかむら}出身のハワイ在住者たちが、昭和五年（一九三〇）にワイキキでピクニックをした際の記念写真である。横八二八ミリメートル、縦一七九ミリメートルの細長い写真に、子どもも含めて一七二人もの人々が写っている。当時、沖家室島の戸数は四四〇戸であったにもかかわらず、これだけ多くの沖家室島出身者たちがハワイに住んでいたのである。

この写真は、瀬戸内海に浮かぶ小島からハワイへ移住した人々が、折を見て同郷出身者と集い、親睦を深めていたことを物語る

貴重な写真である。そして、本稿が明らかにするように、ハワイ在住の沖家室島出身者たちは、毎年集まって記念撮影をし、そのうちの写真一枚は、彼らの出身地である沖家室島にも送付されていたのであった。移住先のハワイと故郷をつなぐ貴重な写真。本稿の第一の目的は、一九三〇年代初頭のハワイ移民関連資料の一つである古写真を読み解くことにある。

ところでこれらの古写真三点は、沖家室島に在住する大谷亮子さんから、「研究に役立ててほしい」と、ハワイからのトランクや旅行鞆とともに、筆者が二〇一三年九月に譲り受けたものである。しかし、地域の歴史を知る貴重な文化遺産であるこれらの資料は、やはり沖家室で保存・活用されるのが望ましいと考えた。本稿の第二の目的は、地域の歴史遺産としての古写真の活用方法について考察することである。



二 沖家室島のハワイ移民略史

山口県大島郡周防大島町沖家室島は、瀬戸内海に浮かぶ屋代島（周防大島）の南東に位置する〇・九五平方キロメートルの小さな島である。貞享二年（一六八五）に、沖家室島に鳴門海峡の漁村・阿波堂ノ浦（徳島県鳴門市）からテグスと一本釣りの漁法が伝えられると、それ以降、沖家室島は漁業の島として発展していった^①。周防大島の東部は「島末」と呼ばれ、沖家室島も含めて水田農耕に適さない土地であったが、江戸時代の中頃にサツマイモが渡来して以来、九十年ほどの間に、島末の人口は三倍にも膨れ上がったという^②。

明治以降、国家による移民政策が進められる中で、沖家室島をはじめとする周防大島では、とりわけ移民の募集に力が入れられた。なぜなら周防大島では人口増加のほかにも、一八八三年（明治十六）には早魃が、一八八六年には屋代村の洪水が起こり、人々の生活は困窮していたからである^③。そのため一八八四年に、「山口県においてもハワイ出稼ぎ者募集に関しては特に人口稠密な大島郡を重視して、大島郡出身の山口県御用掛学務課勤務の日野惣助氏を十一月十日をもって県勸業課兼務にし、さらに大島郡へ出張を命じ各地でハワイ事情の講演其他出稼人の募集に当らせ



写真1 沖家室人会ピクニック記念写真（於 ワイキキ富士亭）（1930年7月6日撮影）

た^④という。

第一回ハワイ移民は、一八八五年、「官約移民」の九四五人から始まる。政府が取り扱いを行った官約移民は、一八八五年一月から一八九四年六月まで二十六回に及んだ。官約移民の出身府県別統計を見ると、広島県に次いで山口県が多く、山口県内でも大島郡の移民数が最も多かった^⑤。またハワイにおいても山口県・広島県の労働者の評価が高く、ハワイ政府が、第四回の官約移民を山口・広島両県より募集することを要望したほどである^⑥。

官約移民の時代が終わっても、人々は親類や同郷者を頼って次々と海外へ出稼ぎに出た。これを「私約移民」と呼ぶ。過酷な労働を強いられた初期の移民に比べれば、私約移民の中には商売で成功し財産を築く人も現れ、さらにそれに憧れて移住する人も増えていった。

では、沖家室島の場合はどうであったのだろうか。後述するように、沖家室惺々会が刊行した機関誌『かむろ』に、沖家室島の人々の在住地が記されている^⑦。それを基にまとめてみると、沖家室本島には四四〇戸が在住し、沖家室島以外の国内には対馬の五十八戸を含む一七〇戸が在住していた。その他海外には、台湾に一九八戸、朝鮮半島に一四三戸、ハワイに一一六戸（ホノルル六十九戸、ヒロ四十七戸）、カナダ・南米に十四戸、満州に十三戸の沖家室島出身の家族が在住していたことになる^⑧。沖家室島の海

外移住先として第三番目にハワイが挙がっていることに注目したい。写真1に写っていた一七二人も、ハワイ・ホノルルに在住する六十九戸の家族が中心となっていたのではないかと推測される。

三 ハワイでの成功者・大谷松治郎

三枚の写真の持ち主である大谷亮子さんの伯父は、沖家室島からハワイへ移住し、事業を起こして成功した大谷松治郎氏（以下、敬称略）である。彼の手記『わが人となりし足跡——八〇年の回顧』の年譜を参照し、写真が撮影された一九三〇年頃までの足跡を追ってみた。

大谷松治郎は、明治二十三年（一八九〇）に沖家室島に生まれ、大島郡西方尋常小学校を二年で退学する。⁹

私はあるときは漁師をしたり、魚島行きに雇われたり、時には大工、船大工の仕事をしたりした。

私はこの孤島には、将来性のないことを考え、大島郡から朝鮮に沢山の人が出稼ぎに行つて成功していることを聞き、私も朝鮮に行つて働きたいと思つた。十六歳の冬であつた。¹⁰

「この孤島」とは沖家室島のことである。松治郎は十六歳にし

て、すでに生まれ育つた沖家室島に将来性はないと判断し、朝鮮行きを考える。しかし結果として、彼は朝鮮には渡らなかつた。次に運命的な出合いが待ち受けていたからだ。

丁度その頃、ハワイのヒロから帰つて来ていた北川磯次郎氏が、私の家に来られた。私は早速ぶしつけにあなたはハワイではどんなお仕事をされていますかと質問した。彼は、魚の行商をやっていると即座に答えられた。雑費を差引いて一回二弗は楽に利益があると説明してくれたので、私の心は動いた。朝鮮行きを変更して、ハワイ行きを決心した。僅か十六歳の少年の幼稚な頭にも、海外雄飛が念頭から離れず、ハワイ行き実現に邁進した。顧みて感慨無量なものがある。¹¹

文中に紹介されている「北川磯次郎氏」とは、ハワイ島ヒロでヒロ水産株式会社を立ち上げて成功した人物である。小川真和子の研究によると、「沖家室出身者はホノルルの他、ハワイ島ヒロにも多く住みつき、漁業を展開した。それと同時に、魚を売りさばく商人もヒロに集まつてきたのである。中でもヒロで操業する叔父の勧めで一九〇二年に沖家室から来布した松野亀蔵が、一九〇七年に同じく沖家室出身である魚行商人、北川磯次郎と共に設立したヒロ水産株式会社（Hilo Suisan Company）は、当時ヒ

口に約八〇人いたという日本人漁業者、魚仲買人、小売り商人たちの活躍の集大成でもあった。彼らは新会社の設立を応援し、株を購入してその経営を応援した¹²⁾という。小川の記述からは、沖家室島出身者の活躍ぶりが伝わってくる。この北川磯次郎が帰国した折に、十六歳の松治郎は矢継ぎ早に質問を浴びせたわけである。

こうして松治郎は一九〇八年一月、十八歳で生まれ育った沖家室島を後にし、香港丸にて神戸を出帆、二月七日にハワイのホノルルに上陸するのである。そして市内の太平洋学院英語科に入学し、卸売商の山本商店に入店する。その後、二十一歳の時にホノルル市内で魚店を開店し、同じ沖家室島出身の柳原カネと結婚する¹³⁾。

魚店を開店してからの活躍は、彼の半生記に掲載されているコラム「漁業界の功労者 大谷松治郎氏」を参照したい。

「郷里沖家室は漁業地なので手近な漁業関係のビジネスに着眼し、一九一〇年にケカウリケ街のキング・マーケット内に生魚店を開業し、一九一三年からは生魚行商を始めたがハワイでは同氏が元祖で第一号ライセンスを獲得した。「改行」一九一八年現在の場所アラ・マーケットに大谷商会、合資会社を設立し、業務は隆盛、一九三九年、マーケットプレース会社を起した。「改行」さらにハワイ水産会社を組織し、当時約五十隻の漁船を有して遠

洋漁業に出漁する大型漁船は十五隻あった。この頃布哇の漁業「は脱力」日本人独占事業としてハワイ産業で砂糖、鳳梨「パイナップル、筆者注」に次ぐ漁業でまさに全盛時代であった」と記されている¹⁴⁾。

松治郎のハワイでの成功を、本人の回顧録のほか、先述の小川真和子の研究からも引用したい。小川によると「ハワイにおけるツナ缶詰製造は、白人プランテーション経営者によって開始されたものの失敗に終わり、日本人の手が加わって初めて軌道に乗ったが、流通においても、日本人がビッグファイブと対等に渡り合ったことを示す事例がある。それは一九二〇年に、大谷松治郎がテオ・H・デービス社、アメリカンファクターズ社を押さえて、米陸軍へ卸すカニ缶詰の入札を勝ち取ったことであった。

一九〇八年に一八歳で沖家室からわずかな資金を手元にハワイへやってきた大谷は、魚の行商を皮切りに事業を拡大し、大谷商会を設立して鮮魚だけでなく水産加工品の流通、そして蒲鉾製造などにも着手していたが、その大谷がビッグファイブの二社を押さえて「米陸軍御用達」となったことは、両社にとって受け入れがたい屈辱であった¹⁵⁾という。このように松治郎は、ハワイの「ビッグファイブ」二社に屈辱を与えるほど、ハワイの水産業で成功していたのである。しかし、その後の両社のいやがらせに、松治郎は両社との取引を一切打ち切り、「新たに米海軍をその顧

客リストに加え、日本及び米本土との流通ルートを積極的に開拓して順調に事業を進展させた¹⁶⁾のであった。このことは、「もはや一九二〇年代のハワイ経済において、水産業界は日本人に対する白人財閥の支配が及ばなくなっていたことを如実に示している」と小川は指摘している¹⁷⁾。

こうして松治郎は、飛ぶ鳥落とす勢いでビジネスを拡大していったが、一九四一年十二月七日、マーケットプレース新築落成式の準備中、ハワイの真珠湾が日本軍によって攻撃された。松治郎は、「永い間の希望が実現し、さあ、これからと張り切っていたが、日米戦争が突発したのでガツカリした」と書き記している¹⁸⁾。その日、松治郎は「敵性日本人」として拘引され、満四カ年、家族との決別を余儀なくされるのである¹⁹⁾。

四 沖家室島の機関誌『かむろ』に登場する大谷松治郎

松治郎のハワイでの成功と活躍ぶりは、出身地である沖家室島にも届いていた。沖家室島では沖家室惺々会が、大正三年（一九一四）九月五日、機関誌『かむろ』を創刊した。『かむろ』は、沖家室の様々な出来事を国内外に住む沖家室島出身者に発信する情報誌であり、昭和十五年（一九四〇）三月十五日までの二十七年間にわたり一五八号まで刊行された。またハワイや台湾、

朝鮮半島などに居住する沖家室島出身者の近況や、彼らからの通信も掲載されるなど、移住先と故郷を結ぶ役割も果たしていた。『かむろ』のバックナンバーに掲載されたハワイ関連記事については、すでに一覧表を作成したので、そちらを参照されたい²⁰⁾。

松治郎は、沖家室惺々会において海外支部ハワイの世話人を務めていた。ほかにもハワイ・ホノルルの世話人として大村啓助の名前が、またヒロの世話人として北川磯次郎と松野辰松の名前が挙げられている。なお大谷松治郎は、ホノルルのほかにも新義州の世話人（朝鮮民主主義人民共和国、平安北道北西端の都市）も担当していた²¹⁾。

松治郎の沖家室惺々会における働きについては、『かむろ』十二号に沖家室惺々会より彼に対して謝意が示されている。「柳原常助氏、大谷松二郎^マ氏。本会の事業に対する布哇ホノルル二氏の御尽力は一々ここに列記しませんが会員も御存知の事と思いません。殊に両氏が私財を投じて当地方に於ける各般の事務を処理せらるるに對して深く感謝致します」とある²²⁾。松治郎は、ハワイで大成功を収めても、決して故郷の沖家室島をないがしろにはせず、沖家室惺々会のメンバーとして、ハワイ在住の沖家室島出身者たちを取りまとめる役割を果たしていたと考えられる。

注目されるのは、松治郎がホノルルの中田由松とともに「母校援助の目的」で、一千元の米国製ピアノ一台を沖家室小学校に寄

贈したことである。²³⁾ 沖家室島出身者たちは、たとえ海外にしようとも、例えば故郷・沖家室島で寺院の改築や新築がなされる際、真っ先に寄付を集めて送金している。大正十年（一九二一）、沖家室島の戎神社改築に際して沖家室島の人々が国内外で寄付を募ったところ、総計で一万九五百円が集まった。そのうち半額以上にあたる五七三二円を集めたのはハワイ在住者たちであった。²⁴⁾ ちなみにヒロの一名は単独で千円の寄付をしているが、この寄付者は北川磯次郎と考えられる。

十六歳の時に、「この孤島には、将来性のないことを考え」た松治郎であったが、決して故郷・沖家室島を捨てたわけではなかった。沖家室島の戎神社改築に際して、どの地域の出身者よりも多額の寄付を集め、また米国製のピアノを沖家室小学校に寄贈するなど、ビジネスで得た資金の一部を、故郷のために役立てていた。故郷とのつながりを大事にする松治郎であったからこそ、次に示すように、ハワイ在住の沖家室島出身者を集めて、親睦の会を持ちたいと準備を進めていたことは想像に難くない。

五 ワイキキでのピクニック

ここにきて、再び写真1に戻ることにした。写真下中央には、「沖家室人会ピクニック記念写真（於ワイキキ富士亭）昭和五年七

月六日」と記載されている。また写真右下には「ホノル、市谷川写真研究所」とあるが、その続きの文字は、写真破損のため解読できない。

この時のピクニックの経緯が、一九二八年の『かむろ』第七十九号に掲載されているので引用したい。²⁵⁾ 福田義勝の「布哇通信」がそれである。なお、本文中の原文にある「ピクニック」は、すべて「ピクニック」に改め、また必要に応じて筆者が句読点を入れた。さらに旧仮名遣いについても現代仮名遣いに改めて読みやすくしている。

第一ピクニックの模様を簡単に御報申上ます。

ピクニックの儀は度々会議に提出されましたが何等其功を得なかつたが、七月二九日の臨時総会で決行に可決しました。老も若きも時の来るを一日千秋の思いで待ちました。八月五日布哇晴の好天気、場所はカハラ公園（我等の住むカカアコから三哩離る）、係員はそれぞれ準備に忙がしい。運搬部員は老若男女を自動車に満積して会場へくくと運ぶ。其処には立派な運動場も右は各商店から出品された景品はテーブルの上に山盛され、飲食店の氷、ソーダ水、果物等の用意されて居た。用意整い、今迄の公園も見て居る中に運動会場と化し、スポーツ気分も十分みなぎった。午前九時半中田会長開会の

挨拶で開会された。左記のプログラムによって、老若男女楽しく愉快に此の一日を暮し、午後四時半目出度く閉会した。

- 一、老若男女 マラソン競争 二、老若男女 旗取競争
- 三、老男 俵クグリ 四、男青年 パイ喰い
- 五、老年青年 二人三脚 六、女 杓子玉スクイ競争
- 七、女 アヤ取競争 八、男女 アップル喰い競争

昼食 一時間休憩、食後記念写真撮影「太字は、筆者による」。
引続き福引が行われて、会員の最も興味を集めたは福引で、景品中一等の白米一俵は柳原雪蔵氏へ、醤油一丁は柳原新一氏に授与された。

- 九、男女 盲目引バリ競争 十、青年女 宝さがし
- 十一、老青 綱引

今回は本会建設以来最初の催で、其成行の如何を心配して居ましたが、成績最も良好で会員一同は元氣と愉快に満ち満ちて、互いに会員の親睦を計るため、又身体の健康上に、今後共益々ピクニックを行うべきであると異口同音に称讚した。ピクニックは今後一年に一回位施行される事であろう。下略

この記事からいくつかの事実が明らかとなる。まず、ピクニックの計画はなかなか実現しなかったが、一九二八年七月二十九日の臨時総会でようやく決行が可決し、八月五日に第一ピクニックが無事に行われたことである。

またピクニックの当日は、昼食のため一時間休憩をとり、その後、記念写真が撮影された。これが、ホノルル沖家室人会の記念すべき第一回ピクニックの写真撮影である。ハワイ在住の同郷の人々が、しばしの間、沖家室島を懐かしみ、親睦を深める絶好の機会であつたに違いない。福田義勝の報告に、「ピクニックは、今後一年に一回位施行される事であろう」とあるように、毎年、ピクニックを行つて、沖家室人会の親睦を図ろうとしていたこともわかる。そして次に示すように、第一回ピクニックの記念すべき写真は、そのまま沖家室島へも送られたのである。ハワイで沖家室島出身者が活躍し、大勢が一堂に会したその繁栄ぶりを、沖家室島の人々に報告するためであつたのだろう。それだけではなく、写真を送るに際しての大義名分もあつた。それが次に示す昭和天皇即位大礼記念である。

六 昭和天皇即位大礼記念の写真

『かむろ』七十九号に「本会博物蒐集部より」²⁶という興味深い

記事が掲載されている。「本会博物蒐集部の趣旨」に賛同した者から、「求めて得られぬ参考品、珍品」が寄贈されたというのである。しかもそれらの品は、沖家室島の「本部（庶務）」に展示されており、「御大典には秘藏品展覧会に出品します」というのである。その寄贈品を次に示す。

福田義勝氏（ホノルル府）

布哇松 絵葉書

泉 勘一氏（ホノルル府）

椰子置物二点

木村啓助氏（ホノルル府）

椰子置物 甘蔗

ホノルル沖家室人会

ホノルル在留沖家室人三百人の写真

大谷松次郎氏（ホノルル府）

布哇年鑑一冊

すべてホノルルからの寄贈である。ハワイの絵葉書、椰子の置物、そしてホノルル沖家室人会からは「ホノルル在留沖家室人三百人の写真」、さらに大谷松治郎からは『布哇年鑑』一冊とある。注目されるのは、「ホノルル沖家室人会」からの写真である

う。この写真こそが、第一回ピクニックで撮影された写真であると考えられるからだ。

そうだとすれば、本稿で紹介した写真1は、残念ながらホノルル沖家室人会の第一回ピクニックの写真ではない。第一回ピクニックは一九二八年八月五日の実施であり、これに対して写真1の撮影日は、一九三〇年七月六日であるからだ。福田の報告にあるように、一九二八年から毎年一回ピクニックが開催されたとするなら、一九三〇年に開催されたのは第三回ピクニックということになる。したがって写真1は、第三回ピクニックの記念写真と考えられる。

さらに気になるのは写真の撮影方法である。これだけ多くの人々が細長い写真に納まっているのである。当時は、パノラマカメラを用いて、被写体となる人々が少し弓なりに並び、ゆっくりとカメラを回しながら撮影が行われた。このような、大勢の人々すべてにピントの合った記念写真が、当時数多く見られた²⁷。なお写真撮影は、ホノルルの「谷川写真研究所」による²⁸ことが、写真に記載された白文字からわかる。このような撮影方法は、沖家室島の泊清寺に保管されている葬送儀礼に集まった親族や友人たちの、同時代の記念写真にも共通していると考えられる。

七 大谷松治郎 厄払い式の写真

次に写真2である。こちらは横四二七ミリメートル、縦一八五ミリメートルと小型サイズである。「ホノルル日本人料理人組合 昭和六年五月一日 於 大谷松次郎氏 厄拂祝宴」と記されている。そして右下には、写真を撮影したスタジオの名前「KANAGURI & TANIGAWA Photo Studio」が記されている。後者の「TANIGAWA」は、先述の「谷川写真研究所」のことなのかもしれない。この写真は、厄払いの祝宴が開かれた際にご馳走を振る舞った料理人たちの記念写真なのだろうか。

写真3は、写真1と同様、大勢の人々が写る細長い写真である。横一〇〇〇ミリメートル、縦一七〇ミリメートルである。写真3中央右寄り、サイコロの「六」の目を振りかざしている男性のすぐ後ろにある三色の横断幕が、写真2にて料理人たちが並ぶ後ろの三色の横断幕と同じであることから、写真3は写真2と同日の同じ場所、つまり一九三一年五月十日に撮影されたのではないかと推測される。写真3については、すでに堀雅昭が「沖家室の大谷亮子さんの家には、ピアノ寄贈者である大谷松治郎が昭和六年五月にホノルルで大勢の人たちと写った写真が残っている。彼はこのとき四二歳の厄払いのため一二〇〇人を招



待したのであるが、ハワイでの日本人の興隆を示す貴重な写真である⁽²⁸⁾と紹介している。厄払い祝宴の写真3では、確かに人々は仮装したり、こいのほりを持つたり、すぐろくのサイコロをかざしたり、愉快な表情をして写っている。また写真1に比べて人数もさほど多くはなく、九十人が写っている。

では、どの程度の規模の「厄払い祝宴」だったのだろうか。大谷松治郎の半生記『わが人となりし足跡——八〇年の回顧』から引用してみよう。

巻末の「大谷松治郎 年譜」によると、「昭和六年（一九三二）四十二歳の厄払いに千二百名を招待して開宴」とある⁽²⁹⁾。次に「蒲鉾製造業開始——四十二の祝宴」と題した彼の文章を見てみよう。

一九三二年四月二十三日は私の四十二歳の誕生日。カカアコ、住宅近隣地を正月にビシップ財団から、百三十フィートと百二十フィート四方の土地を、二十ヶ年契約で手に入れ、ここに、にわか宴会場を作り、五月十日、初老の厄払い祝宴を開催した。

米国陸海軍将校連をはじめ、商業上関係取引先及び友人知己千数百十人を招待した。盛大なるパーティーであった。何分規模が大きいので、十日前から準備に取りかかり、ホノルルの料理人二十四人と、土地の芸者や娘さんなど三十余人の手伝

右：写真2 ホノルル日本人料理人組合員写真（1931年5月10日撮影）

下：写真3 大谷松治郎氏 厄払い祝宴記念写真



いを得、当時記録破りの大宴会だったと今なお話題に残っている。その頃、三日がかりの宴会で終了後会場に大谷商会大倉庫を建設した。^⑧

宴会は、大谷松治郎が正月にハワイで入手した自らの土地に宴会場を設け、千百数十人の客を招待して、三日がかりで行われた。宴会の客も、「米国陸海軍将校連をはじめ、商業上関係取引及び友人知己」というから、ハワイ在住の日本人に限らず、ハワイで活躍する白人たちも呼ばれていたのだろう。招待客に見る松治郎の人間関係の広さにも、彼のハワイでの成功ぶりが窺える。

写真3は、その宴会で撮影されたものであるが、「千百数十人」が写っているわけではない。しかも日本人ばかりである。少し想像を逞しくしてみれば、松治郎は前年の一九三〇年にワイキキで撮影したピクニックの記念写真を思い出し、出身地である沖家室島の人々を集めて、彼らとともに記念撮影をしたのではないかということだ。そしてその後、これらの写真を日本に持ち帰り、額に入れて一九三〇年のピクニックの写真とともに自宅に飾っていた。そのように考えると、本稿で紹介した三枚の写真は、松治郎がかねてから実現しようと考えていた沖家室人会の記念すべきピクニックの写真、そして彼自身がハワイでのさらなる飛躍を見据えて企画した厄払い祝宴の写真、さらにその大祝宴を支えてく

れたホノルルの料理人たちの写真という、彼のハワイでの思い出が凝縮された品だったのではないだろうか。その証拠に、これら三枚の写真は、大きさの異なる、ほぼ同じ規格の木製の額縁に収まっている。

八 地域の歴史遺産として

二〇一三年八月末、筆者は沖家室島に天理大学の学生たちを連れて民俗学実習に訪れた。その際、初めて大谷亮子さんにお目にかかった。筆者は、すでに二〇〇七年に『山口県史・民俗編』の執筆のため、沖家室島で調査を開始していた。^⑨しかし、大谷さん宅には過去に数多くの研究者が訪れてインタビューをしていると地元の方から伺っていたので、筆者は訪問を控えていた。しかし今回は、地元の郷土大学の依頼もあり、天理大学の民俗学実習の一環として学生たちとハワイ移民について調べることとなり、学生を連れて初めて大谷さんを訪ねた。^⑩彼女はとても親切に、そして熱心に話をしてくださった。そして、ぜひ大谷松治郎が建てた家もご覧ください、と案内してくださったのである。その家の二階の長押に、額に入れて飾ってあったのが、本稿で紹介した写真三点である。筆者は一瞥して、その写真がいかに貴重であるか、また大谷松治郎その人がいかに大切に保管していたかを感じ取っ



写真4 大谷松治郎氏のトランクを運ぶ (2013年9月7日撮影)

た。

民俗学実習を九月一日に終えて奈良に戻り、筆者は再び、沖家室島へと、とんぼ返りした。

九月七日、約束していた大谷亮子さんを再度、訪ねた。大谷さんは、「待ってましたよ。まあまあ、遠くから来てくださって」と、すぐに松治郎宅を案内してくれた。私が再訪問するからと、近くの方に頼んで、玄関付近の草をきれいに刈っておいてくださった。そして大谷さんは、「写真も何も、すべて差し上げますから、どうぞお持ちください」とおっしゃったのだ。

空家の二階で梱包作業をした。まず、長押から額に入った三枚の写真を下ろし、埃をはらって梱包材でくるんだ。次に、部屋の奥にあった大型トランクと小型の旅行鞆二つを運んだ。大型トランクは相当な重さであったので、沖家室島の松本昭司さん、福田隆司さん(写真4左)、横山和明さん(写真4右)にお願いして、一緒に運んでもらった。

こうして、写真三点、トランク一点、革鞆二点を空家から外に出し、しばし虫干しにした。また、箱に入ったスナップ写真一式も持ち帰った。スカヤナーでデジタル化して、大谷さんにデータを差し上げようと考えたからだ。

写真を手持ちで天理まで運び、帰宅後、業者に頼んで写真のクリーニングとデジタル化を済ませた。そして元の写真と同じ大き

さにプリントアウトしたものを、再び木製の額に入れ、また現物の古写真は、中性紙でできた古文書保管のための別注の箱に入れた。それらを持って、再び十月末に沖家室島を訪れた。

この日は、シンガーソングライターの高石ともや氏のコンサートが沖家室島の泊清寺で開かれる日であった。沖家室の方々も大勢集まるので、写真のお披露目にはちょうどよいだろう、と泊清寺住職の新山玄雄氏が、筆者のために時間を作ってくださったのである。高石ともや氏のコンサートと、ノンフィクションライターの佐野真一氏のお話の前に、筆者が沖家室島の皆さんに古写真を披露し、また会場に來られていた大谷亮子さんを紹介した。そして、「地域の文化遺産は、地域で保存、活用するのが一番だと考え、デジタル化して複製したものと、保存用の箱に入れた古写真を両方お持ちしました。これを、旧沖家室小学校の一室、ハワイから寄贈されたピアノの横に置いて、小さな展示室が作ればいいなと思います。それに向けて、天理大学の学生たちともにご協力させていただきます」と発言した。会場からは拍手が沸き起こり、皆さん賛同してくださった。今後、展示室をどのように作っていくか、沖家室島の方々と相談しながら、進めていくこととなった。

ところで、一九三〇年に沖家室島の人々の写真を撮影して、それを故郷に送り、自らもそれを保管していた大谷松治郎は、新た

に「沖家室人観光団」を組織することも考えていた。ハワイで生まれ育った日系二世を沖家室へ連れていき、「実際の日本を知らぬ者」に沖家室を見聞させ、しばらく滞在させようとしたのだろう。逆に、沖家室の人々がハワイへ渡航する機会にもなると期待を寄せていた。「この島に将来はない」と、十八歳で沖家室島からハワイへ旅立った青年は、決して故郷を忘れることなく、むしろ常に故郷の存在を強く意識しながら、ハワイで躍進していったのであった。

大谷松治郎の寄贈したピアノの隣に、沖家室島出身のハワイ在住者たちがワイキキでピクニックを楽しんでいる記念写真が飾れるように、展示室の実現に向けて、筆者ができることを一つひとつこなししていきたい。

注

- (1) 宮本常一・岡本定『東和町誌』東和町、一九八二年、四六六頁。
- (2) 宮本常一『周防大島』宮本常一編『島』有紀書房、一九六一年、九七～九八頁。
- (3) 周防大島町『周防大島町誌』周防大島町、一九五九年、五九八～六〇〇頁。
- (4) 土井彌太郎『山口県大島郡 ハワイ移民史』マツノ書店、一九八〇年、二三頁。
- (5) 外務省記録局『日本人民布哇国へ出稼一件 出稼人名簿之部』（外務

- 省記録3、8、2、514、外務省外交史料館蔵）一八八五〜一八九四年、安井眞奈美「故郷の民俗」『山口県史 民俗編』山口県、二〇一〇年、八二一頁。
- (6) 広島県編『広島県移住史 資料編』一九九一年、九二七頁。
- (7) 沖家室惺々会「昭和五年一月現在 沖家室島人名録全」『かむろ』第八十五号、一九三〇年。
- (8) 安井眞奈美「表21513 沖家室および島外在住者の戸数一覧」(安井、注5前掲論文)、二〇一〇年、八二五頁。
- (9) 大谷松治郎「大谷松治郎 年譜」『わが人となりし足跡——八〇年の回顧』文洋社、一九七一年、一七一頁。
- (10) 大谷松治郎(大谷、注9前掲書)、二頁。
- (11) 大谷松治郎(大谷、注9前掲書)、二〜三頁。
- (12) 小川真和子「ハワイにおける日本人の水産業開拓史——一九〇〇年から一九二〇年代までを中心に」『立命館言語文化研究』二十一巻四号、二〇一〇年、四三頁。
- (13) 大谷松治郎(大谷、注9前掲書)、一七一頁。
- (14) 大谷松治郎「漁業界の功労者 大谷松治郎氏」(大谷、注9前掲書)、一四一頁。
- (15) 小川真和子(小川、注12前掲書)、四八頁。
- (16) 小川真和子(小川、注12前掲書)、四八〜四九頁。
- (17) 小川真和子(小川、注12前掲書)、四九頁。
- (18) 大谷松治郎(大谷、注9前掲書)、六一頁。
- (19) 大谷松治郎(大谷、注9前掲書)、六二頁。
- (20) 安井眞奈美・飯島吉晴・齋藤純・二〇一三年度民俗学実習班「雑誌『かむろ』に掲載されたハワイ関連記事——山口県大島郡周防大島町沖家室島二〇一三年度民俗学実習報告」『古事』十八、二〇一四年、四七〜六五頁。
- (21) 『かむろ』七十二号、一八頁。
- (22) 『かむろ』十二号、一五頁。
- (23) 『かむろ』八十四号、二頁。
- (24) 『かむろ』三十六号、五〜一〇頁。安井眞奈美(安井、注5前掲論文)、八三三頁。
- (25) 『かむろ』七十九号、一一〜一二頁。
- (26) 『かむろ』七十九号「本会博物蒐集部より」、三一〜三二頁。
- (27) 写真家・岩根愛さんのご教示による。
- (28) 堀雅昭「ハワイに渡った海賊たち——周防大島の移民史」弦書房、二〇〇七年、二二五頁。
- (29) 大谷松治郎(大谷、注9前掲書)、一七二頁。
- (30) 大谷松治郎(大谷、注9前掲書)、四八頁。
- (31) 安井眞奈美(安井、注5前掲論文)。
- (32) 二〇一三年八月三十一日、山口県大島郡周防大島町東和総合センターにて「平成二五年度第三回(再開第七六回)周防大島郷土大学講義(主催 周防大島郷土大学、共催 周防大島町文化振興会東和支部)」が「周防大島とハワイの交流」とのテーマで開催された。筆者はゲストスピーカーとして「ハワイ移民と故郷・周防大島とのつながり」と題して講演し、天理大学民俗学実習班の学生十五人もあわせて発表の機会をいただいた。シンポジウムの様子は、大谷亮子さんの聞き取りも含めて「ハワイ移民の歴史探る——山口・周防大島 天理大生が聞き取り」(『中国新聞』二〇一三年八月三十一日、久行大輝)に、また「ハワイ移民史 学生探る」(『朝日新聞』二〇一三年九月十一日、小川裕介)と題してそれぞれ新聞に掲載された。
- (33) 『かむろ』八十二号、八頁。